

事後評価報告書（日中（MOST）研究交流「気候変動」）

1. 研究課題名：「北太平洋縁辺海から外洋における生態系システムの気候変化に対する応答」

2. 研究代表者名：

2-1. 日本側研究代表者：東京大学 大気海洋研究所 教授 植松 光夫

2-2. 中国側研究代表者：中国海洋大学 環境科学工程学院 教授 ガオ ヒュウイウオン

3. 総合評価：（ B ）

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

本課題の研究活動がユネスコ／海洋科学委員会での縁辺海の国際共同研究プロジェクトとして認められ、東アジアの海洋科学コミュニティを形成するきっかけとなりつつある点は評価できる。しかしながら、当初の計画にあった気候変化に対する生態系システムの応答については、成果の記述が充分でないことから、成果を評価することが困難であった。この点について、今後の研究方針を言及して頂きたかった。また、観測により得られたいくつかの知見（黄砂とプランクトン増加、硫酸アンモニウム粒子等）のみならず、これらを総合して初期目的の「大陸起源の人為的物質および自然起源物質の輸送と海洋における沈着量の把握」とその全体的な量の推定に関しても説明があれば良かった。

(2) 交流成果の評価について

日本側と中国側を合わせ、延べ出張日数が約 150(人・日)と数多くの日中研究交流を精力的に実施出来たことは評価できる。一方、日本側から中国側への訪問実績は平成 23 年度 1 回のみである。より活発な中国訪問を実施した方が、さらに相互理解も深まったと思われる。

(3) その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

日本側および中国側の連名ではないが、関連する論文発表と学会発表を数多く行っている点は評価できる。しかし、共著論文が発表されていないことは残念な結果である。また、ワークショップ、セミナー、シンポジウムなどの開催回数が比較的少ない様にも思われる。一方、国際関係の影響により、学術的分野に影響が及ばない様な具体的な対策、学術交流が停滞しないような枠組やサポート体制の構築を本課題の研究者のみならず、全体として考える時期になっているとも感じた。